

# 仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News



あたりいちめん水を噛む音。  
籠はキラキラ、  
風鈴の音、  
あたりいちめん水をこぼす。

菅原克己詩集「日の底」  
(1958年 飯塚書店)

第三十八号

## プラザ一軒

文学のある風景



椅子にぎり上る。  
外は濃藍色のたなばたの夜。  
肥つたおやじは  
小さい妹をながめ、  
満足気に氷を噛み、  
ひげ拭く。  
妹は匙ですくう  
白い氷のかけら。  
ぼくも噛む  
白い氷のかけら。  
おやじはひげ拭く。  
妹は氷をこぼす。  
おやじにはぼくが見えない。  
ふたりには声がない。  
死者ふたり、  
つれだつて帰る、  
ぼくの前を。  
小さい妹がさきに立ち、  
おやじはゆつたりと。  
東一番丁、  
プラザ一軒。  
たなばたの夜。  
キラキラ波うつ  
硝子簾の向うの間に。

色あせたメリングスの着物。  
おできいっぱいつけた妹。

東一番丁、  
プラザ一軒。  
硝子簾がキラキラ波うち、  
あたりいちめん氷を噛む音。  
死んだおやじが入つて来る。  
死んだ妹をつれて  
水水喰べに、  
ぼくのわきへ。

ミルクセーキの音に、  
びっくりしながら  
細い脛すねだして

少し上級生になつて「様」のつく  
熟語を習う。様子、様相、一様、異  
様、同様などということばを知る  
が、すべてありさま、状態、すがた、  
かたちをいうので、どこにも名前の  
下に書く「様」の意味はない。それ  
なのになぜ名前の下には「様」がつ  
くのか。学校の先生や父親に訊ね  
ればあるいは教えてもらえたかも  
知れないが、そういうときなぜか質  
問せず飲み込んでもしまう癖があり、  
聞かないでしまつた。

それから五十年、六十年と経つ  
てしまつた。いま突然ふたたび思  
い出し、本当にあれはなんで「様」  
がつくようになつたのだろうとい  
う疑問が湧いた。

それで辞書を開いてみると。小さ  
な辞書にはこういう厄介なことは  
書いてないから、大きな辞書を開  
く。「日本国語大辞典」に当たつて  
みた。そうしたら「さま」について  
実際にいろいろなことが書いてある。  
「さま」はふるいふるい日本語で、  
さまざまな意味があり、その意味が  
時代とともに変遷してきたらしい。

それが五十年、六十年と経つ  
てしまつた。いま突然ふたたび思  
い出し、本当にあれはなんで「様」  
がつくようになつたのだろうとい  
う疑問が湧いた。

それで辞書を開いてみると。小さ  
な辞書にはこういう厄介なことは  
書いてないから、大きな辞書を開  
く。「日本国語大辞典」に当たつて  
みた。そうしたら「さま」について  
実際にいろいろなことが書いてある。  
「さま」はふるいふるい日本語で、  
さまざまな意味があり、その意味が  
時代とともに変遷してきたらしい。

いつか方向や向きを表すようにも  
なつた。そこから派生して、いつも  
か人の居所、身分、氏名に添えて敬  
意を表すときに用いられるようにな  
った。ころは室町時代のようであ  
る。「若君様」「お殿様」みたいな  
用法がまず出てきて、それから氏名  
にも直接付くようになったらしい。  
それまでは「殿」がもっぱら使われ  
たが、江戸時代になって「様」の用  
例が増加して、今日に至るものによ  
うである。

ふうむ、なるほど。辞書は引くも  
のだ。長年の疑問が氷解した。わわ  
れわれは室町時代、江戸時代のな  
ごりを引いて会話し、手紙を書いて  
いるのである。

ふつう使う「さん」は「さま」から  
転化した。これは理解しやすい。  
「さま」よりずっと軽くて、身近で、  
日常の会話になくてはならない敬  
称である。

名前以外にも付く場合がある。  
「ごちそうさま」「ご苦労さま」「お  
待ちどうさま」などとい。これは  
「ごちそうさん」「ご苦労さん」でも  
いいが、「さま」の方が丁寧だ。  
「ご」と「お」と丁寧表現で始まつて  
おわりを「さま」で受ける。「ちそう  
さま」「苦労さま」とは決して言わ  
ないのである。

## 学芸室日記

○2019年9月~11月

1999年、当館が開館して間もなく発足した「仙台文学館友の会」。その20周年を記念して、これまでの活動をふりかえた年譜や、毎年デザインが変わる会員証、会報のバックナンバーなどを紹介する展示を開催しました。館とともにあゆむ友の会。ご関心ある方のご入会をお待ちしています!



展示作業終了後のひとコマ



○2019年11月30日(土)

4年ぶりとなる小池館長のトークイベント「小池光ことばのセッション」を開催。ゲストは、せんらいメディアテークの館長である哲学者・鷲田清一さん。哲学と短歌それぞれの専門から、「ことばの力」について対話を1時間半。会場は、窓ガラスが曇るほどの熱気で包まれました。

### 【お知らせ】

仙台文学館館長の小池光が2020年3月末で退任し、4月から仙台在住の小説家・佐伯一妻氏が新館長に就任します。

佐伯氏には、これまで「仙台文学館ゼミナール」での近代文学の名作講読やエッセイ実作講座などでお力添えをいたしましたが、今後は館長としてさまざまな企画に関わっていただく予定です。小池館長が就任以来継続してきた短歌講座も、引き続きゼミナールのプログラムとして開講いたします。

新たな体制で春を迎える仙台文学館に、変わらぬご支援をどうぞよろしくお願ひいたします。

# 『自然の中で』

佐々木ひとみさんがえがく

## 仙台・宮城・東北

今回「私の一冊」にご寄稿いただいた佐々木ひとみさんは、これまで仙台・宮城、東北にちなんだ児童文学作品を多く手がけてきました。

仙台七夕をテーマにした『七夕の月』や、『伊達武将隊』をモデルにした『兄ちゃんは戦国武将!』の作中には、仙台の名所、老舗、名物などがつぎつぎに出てきます。野泉マヤさんと堀米薰さんとの共著『みちのく妖怪ツアーア』シリーズでは、鬼婆や座敷わらしといった東北の妖怪たちのパワーが全開。また、地名は記されていなくても、なんとなく「宮城のこのへんが舞台だな」と見当がつく作品もあります。そんな親しみやすさに引かれて読んでいくうちに、たとえば七夕飾りの意味や仙台空襲など、「実はよく知らなかったこと」に出会い、あらためて地域に目を向けたくなってくる佐々木さんの物語たち。そこに登場する、おじいちゃんやおばあちゃん、地元の人たちの存在も印象的です。

その佐々木さんの最新刊は『ストーリーで楽しむ伝記 伊達政宗』。佐々木さんがえがく政宗公に大注目です!



『七夕の月』  
佐々木ひとみ/作 小泉るみ子/絵  
2014年 ポプラ社



『兄ちゃんは戦国武将!』  
佐々木ひとみ/作  
浮雲宇一/画  
2018年 ぐもん出版



『みちのく妖怪ツアーア』シリーズ  
佐々木ひとみ・野泉マヤ・堀米薰/作  
東京モノ/絵  
2018年～2019年 新日本出版社



『ストーリーで楽しむ伝記  
伊達政宗』  
佐々木ひとみ/著 鈴木淳子/絵  
2020年 岩崎書店

で丁寧に綴っている。だからこそ深く共感し、強く惹かれたのだと思う。とはいってこの名作を何歳頃に読んだのか、実は正確には覚えていない。けれど、読み終えた瞬間のことだけは覚えている。ぱたんと本を閉じて顔を上げた瞬間、見慣れた景色が違つて見えた。鎮守様の古い祠、岩魚が泳ぐ井戸、昔から続く祭りや行事。——自分が暮らす高原が、特別なもののように思えてきた。

それは、私が初めて自分の「ふるさと」を意識した瞬間だった。長じて、児童文学を志すにあ

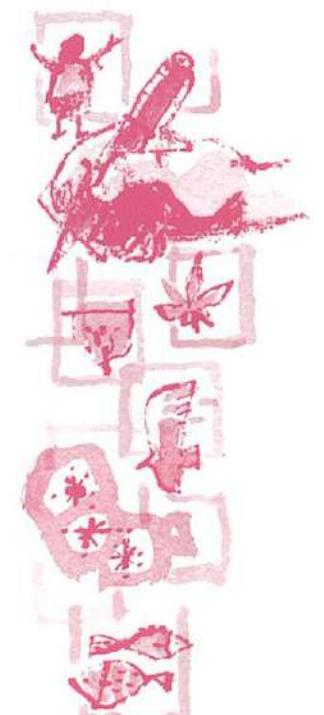
たり考えたことは、「ふるさとの魅力を見つけて磨き上げ、自分にしか書けない物語を書く」ということだった。そんな思いで書き上げたデビュー作『ぼくとあいつのラストラン』が、出版後まもなく「第二〇回 児童文学賞」を受賞したことには、椋鳩十を敬愛する私にとって、とびきり嬉しく、また、縁の不思議さを感じずにはいられない出来事だった。

仙台で暮らし始めて三〇年余り。「ふるさとを書く」という姿勢は、今も変わらない。『七夕の月』も『兄ちゃんは戦国武将!』も、この春出版された『ス

トーリーで楽しむ伝記 伊達政宗』も、仙台の物語だ。私にとっては政宗公も、ふるさと・仙台の「誇るべき宝」であり、「伝えるべき物語」なのである。

今回『自然の中で』を再読して驚いたことがある。読み心地

がいいのだ。まるで、自分の作品であるかのように。自分の文體の原点を発見した思いがした。そして、そういう意味でもこの本は、私の大切な一冊なのだと改めて感じた。



佐々木ひとみ (ささき ひとみ)

児童文学作家、コピーライター。茨城県日立市生まれ。東北福祉大学卒業後、茨城の病院に理学療法士助手として勤めたのち、仙台の広告制作会社にコピーライターとして勤務。現在はフリーのコピーライターとして活動する傍ら、児童文学作家として作品を執筆している。おもな著書に「ぼくとあいつのラストラン」(第20回椋鳩十児童文学賞受賞)、「ゆずの葉ゆれて」のタイトルで映画化)、「七夕の月」、「兄ちゃんは戦国武将!」、「ストーリーで楽しむ伝記 伊達政宗」ほか。野泉マヤ、堀米薰との共著に「みちのく妖怪ツアーア」シリーズがある。河北新報夕刊(毎週木曜日)に「がんづきジャンケン」を連載中。仙台市在住。



茨城県北部の山奥の、高原という地区で生まれ育った。目に映るものは、山と田んぼと小さな空ばかり。幼稚園も保育園も近くになかったため、子どもたちはみな小学校に入学する前日まで野山を駆け回って遊んでいた。

当時同居していた叔父は、小

学校の教員という仕事柄、そんなにやりした環境に思うところがあつたようで、せっせと本を買っててくれた。おかげで物心ついた頃にはすでに、「本は面白い」という刷り込みが出来上がっていた。

そんな私にとって、小学校の図書室はまさに宝の山だった。

物語はもちろん伝記、ノンフィ

クション、図鑑や百科事典まで、

むさぼるように読んだ。

本にのめり込んだ理由は他にもあった。高原が、退屈でつまらない場所に思えたためだ。いつも「ここではないどこか」に行くことばかり考えていた私にとつて、本は、見知らぬ世界と自分をつなぎ、遠くへ連れ出してくれる魔法のドアだった。

そんな風に遠くに向きがちだった私の目が、足元に向かうきっかけとなつたのが、椋鳩十の『自然の中で』だった。

椋鳩十は、「月の輪グマ」や「片耳の大シカ」といった動物文学で知られる作家だが、「自然の中ではそれらとは趣が異なる。全体を貫くストーリーはなく、作者のふるさと・長野県喬木村の美しい自然や昔ながらの風習、家族や村人との交流などが、少年である「わたし」の目を通して隨筆的に描かれている。

ぶり返ると、私がこの作品に惹かれた理由は、「わたし」を取り巻く環境や人間関係、さらに

『片耳の大シカ』といった動物文学で知られる作家だが、「自然の中ではそれらとは趣が異なる。全体を貫くストーリーはなく、作者のふるさと・長野県喬木村の美しい自然や昔ながらの風習、家族や村人との交流などが、少年である「わたし」の目を通して隨筆的に描かれている。

椋鳩十は、「月の輪グマ」や「片耳の大シカ」といった動物文学で知られる作家だが、「自然の中ではそれらとは趣が異なる。全体を貫くストーリーはなく、作者のふるさと・長野県喬木村の美しい自然や昔ながらの風習、家族や村人との交流などが、少年である「わたし」の目を通して隨筆的に描かれている。

椋鳩十は、縁側で一人遊んでいた私は驚いて、あーんあーんと泣き出した。すると、イチロさんは例のだみ声で「どうした、どこか痛くしたか?」と言ひながら、私の胸のつしと近づいてきた。私は家の中に逃げ込んだ。そしてイチロさんが去るのをひたすら待つた。しばらくして戻ってきた。しばらくして戻つてみると、縁側に、自然薯がころりと置かれていた。そしてその横には、赤いキヤラメルの小箱が添えられていた。



椋鳩十「自然の中で」  
(椋鳩十全集11)  
(初版1970年 ポプラ社)

# 佐左木俊郎を知る!!

知る人ぞ知る宮城ゆかりの作家

当館二〇二〇年度春の企画展の主人公は、宮城県出身の作家・佐左木俊郎。佐左木は、大正から昭和初期にかけて農民小説や探偵小説の分野で活躍しましたが、現在では知る人ぞ知る存在になっています。そこで今回は、佐左木俊郎を知つていただきたく、その人物像と作品に迫つてみました。



佐左木俊郎

佐左木俊郎って  
どんな人?

会期 4月25日(土)~6月28日(日)  
休館日 5月4日(月曜日)、6月25日(木)  
開館時間 9時~17時  
(展示室への入室は16時30分まで)

観覧料 一般 580円  
高校生 230円  
小・中学生 110円  
(各種割引あり)

※会期中、関連イベントを開催予定です。詳細は展示のチラシ、仙台文学館ホームページなどをご覧ください。



大崎市岩出山にある佐左木俊郎の記念碑

どんな作品を書いた?

佐左木がさかんに執筆したのは、当時の農村の過酷な現実を描いた農民小説、

また、都市生活者の心理とそのすれ違いから生じる悲劇でした。いずれも昭和初期の社会状況を反映しているような作品です。そのほか、探偵小説も多く手がけています。

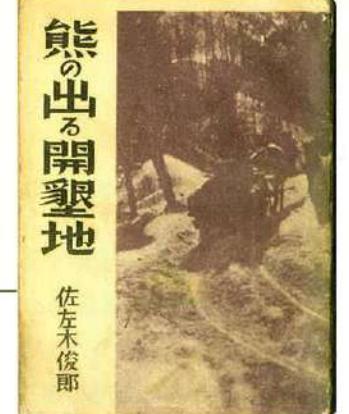
編集者・佐左木俊郎

文芸誌「文章俱楽部」「文学時代」の編集者でもあつた佐左木は、当時第一線で活躍していた文学者と交流をもつていました。

現在もマニアックな人気を誇る長編小説「ドグラ・マグラ」の作者・夢野久作もそのひとり。左で紹介している資料は、昨年、新聞でも「未発表書簡見つかる」とニュースになつた夢野の書簡（当館寄託資料）。文面から、夢野の編集者・佐左木への信頼を見てとることができます。このほか佐左木宛の書簡としては、尾崎士郎、室生犀星、西条八十などからのものが残っています。



探偵作家の仲間たちと 左から3人目・横溝正史、その右隣が佐左木俊郎、1人おいて甲賀三郎、江戸川乱歩、大下宇陀児。



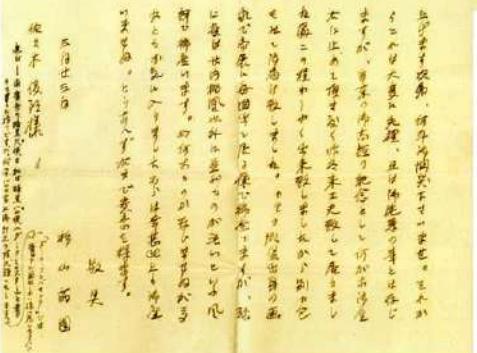
『熊の出る開墾地』(1930年 天人社)



『街頭偽映鏡』(1931年 赤爐閣書房)



『黒い地帯』1930(昭和5)年発表  
とある農村の煉瓦工場では日々煉瓦が焼かれ、周囲の良質な田圃の土がその材料に変わっていました。地主の森山は小作人のために断固として工場に土地を売らなかったが、その頑なな意思が悲劇を呼ぶ。



夢野久作(杉山崩円)書簡 佐左木俊郎宛  
推定1932(昭和7)年3月23日

佐左木のもとに送っていた原稿の題を「脳髄は物を考える所に非ず」と直してほしい旨を伝えている。

「少女地獄」など。  
「少女地獄」など。



仙台在住の漫画家・ズスキズヒロさんが  
描く佐左木俊郎

企画展  
農村と都市 昭和モダンの中で  
「作家・編集者 佐左木俊郎」

## 仙台文学館特製 オリジナルグッズ & 書籍

当館でしか手に入らない！

開館から20年、当館では数々の図録やオリジナルグッズを製作してきました。ここであらためて、おすすめ文学館グッズの「ごく一部」をご紹介します！

※価格はすべて税込

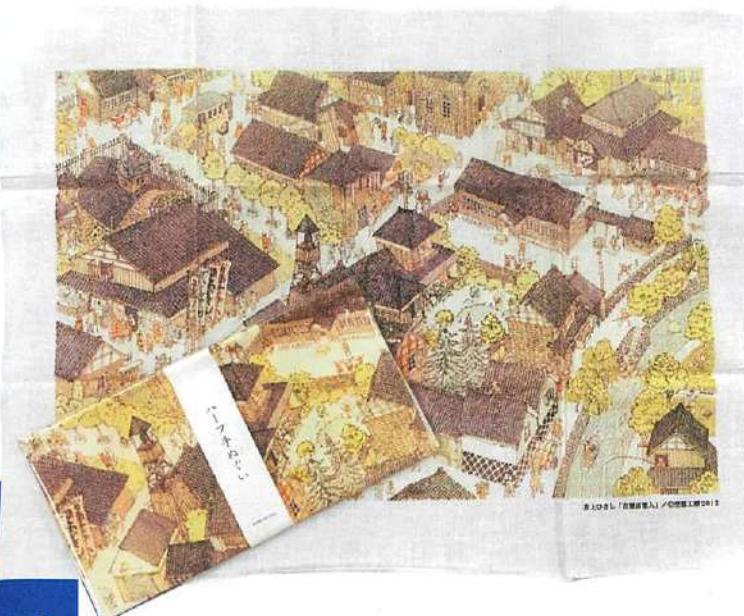
### 『吉里吉里人』

#### クリアファイル / 絵はがき / ハーフ手ぬぐい

初代館長・井上ひさしの代表作『吉里吉里人』(1981年、新潮社)の安野光雅さんによる表画が、クリアファイル・絵はがき・手ぬぐいになりました。細かな描き込みの中にさまざまな遊び心を発見できる安野さんの絵を、じっくり見たい方におすすめ。



クリアファイル 260円  
絵はがき 83円  
ハーフ手ぬぐい470円



### 「小池光短歌講座」記録集

大好評「小池光短歌講座」の記録集(2007~2018年まで12冊が既刊)。1年間の講座の中で受講者の方々がつくった短歌を選び、小池光館長の講評・アドバイスを収録しています。短歌が上手くなりたい方はもちろん、読み物としても楽しめます。

500~550円



### 図録 『尾形亀之助展「それから その次へ」』

2000年に開催した企画展の図録。大河原町で生まれ、晩年は仙台市の木町末無(現・青葉区立町)に住んでいた詩人・尾形亀之助。大正から昭和にかけて活躍し、草野心平・高村光太郎・宮沢賢治らとも交流を持った亀之助の詩には、今でもディープなファン多し。その魅力を味わえる1冊です。

600円



### 販売場所

仙台文学館2階受付横にグッズコーナーがあります。ここで紹介したもの以外にも、限定グッズ・仙台ゆかりの作家に関する図録・書籍を取り揃えていますので、ご来館の際はぜひのぞいてみてください。

仙台文学館ホームページ内「刊行物・グッズ」ページにも一覧を掲載しています。郵送での販売もおこなっていますが、商品の在庫を確認する必要があるため、まずは電話(022-271-3020)にてお問い合わせください。



### 図録

#### 『みやぎの杜の文学者たち』

明治~昭和の宮城ゆかりの作家がぎゅっと詰まった、フルカラーで読みごたえ抜群の図録。「地元にこんな作家がいたんだ」「この人も宮城県に関係していたのか」という発見の連続です。

1800円



### 古山拓 絵はがき / 一筆せん(各4種類)

仙台在住の水彩画家・古山拓さんのイラストが入った、文学館オリジナルの絵はがきと一筆せん。透明感とあたかみのあるイラストは、ちょっとした連絡も美しく彩ってくれます。古山さんは、この「仙台文学館ニュース」の創刊から、シリーズ「私の一冊」(P.2~P.3)の挿絵を手がけてくださっています。

絵はがき各種 110円  
絵はがき4枚セット385円  
一筆せん各種 440円



### 『大佛次郎 大池唯雄 往復書簡集』

宮城県柴田町出身の直木賞作家・大池唯雄。彼に目をかけていた先輩作家・大佛次郎。昭和に活躍した作家師弟がやり取りした手紙の内容を翻刻し、1冊の本にまとめました。

605円

